
「平成の撃剣」撃剣シリーズ第一話

介護さぶらい(かいごさぶらい)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「平成の撃剣」撃剣シリーズ第一話

【Nコード】

N7079P

【作者名】

介護さぶらい（かいごさぶらい）

【あらすじ】

現代剣道と古流剣術（撃剣）。剣道や柔道は世界的に知られ、メジャーなスポーツです。その源流は日本古来より連綿と伝わる「古武道」です。その一つ、現代剣道と古流剣術は今や、天と地ほどの開きがあります。両者を対比し活写した小説です。

（前書き）

剣道は柔道と並び、日本が世界に誇るメジャーなスポーツになりました。

その原点は、古来より脈々と伝えられてきた「古武道」です。なかでも、古流剣術は、近代剣道の源流でもあると思います。

しかし、この両者、今ではその様相は天と地ほどの違いがあります。何処がどう違うのか、掌編で著してみました。

秋晴れのまさに「小春日和」になった。全国大会出場に向け、剣道の県地区大会決勝戦が武道館で開催された。当日は、同大会慣例の行事となっている「古武道」関係者らの公開演武も披露された。居合、棒術、柔術、試斬等々である。決勝戦や慣例の演武も無事に終え、勝者を称える表彰式が行われようとしていた。

その式の直前に、大会会長（県剣道連盟理事長）が遅刻する椿事が起こった。

「居合いとちやう言うてんのにな」一度、たたんで仕舞い込んだ胴着を、また着替え直した。

「先生、では、宜しくお願いします」と、剣道着姿の青年が、折り目正しく、一礼して声をかけて行った。試斬の演武は居合いではない。「青竹試斬」は斬り飛ばした竹が、見学者に当たると大怪我をすることがある。ために、演武には万全を期し、最後に回されることが多いのだ。（主催者は、当たり前だが、大会を無事終えることに気を遣う）。

今日も、最後の演武者だった。

「理事長が是非、居合いを見せていただきたい、とのことで、先生もう一度演武をお願いします」と、呼び止められた。引き上げ準備

の途中であつた。周りに、古武道関係者は誰もいない。

「えーっ、居合い、じゃないんですけど、ね」と、顔を上げたが、青年はもう踵を返して走り去っていた。居合い、組太刀、棒術等の方々は、演武を終えると肅々と引き上げてしまっていた。

「はい、分かりました。お相手してくれる人がいらっしやれば」と、追いかけるように返事をした。(しゃゝない、何かやるか)。とは、思ったものの、持ってきた「青竹(径約5センチ、長さ約1メートル)」は、1本だけである。演武で斬ってしまった。(相手になつてくれる人は、おらんやろな、さゝあ、どうするか?)。場内を見回した。

「何方か、ちょっとお相手してもらえませんかね?」屯する、青い剣士軍団に声を掛けてみた。

「えっ」と数人が、こちらを見た。気圧されるような、鋭い目つきをした者もいる。

「ちょっと、お待ち下さい」と、一人が立ち上がり、一礼して、ひな壇の方へ走った。

「すみません」しばらくして。ひな壇の方から、手招きされた。(ややこしなりそうや)。

「いや、理事長が居合いを見たい、是非にと、仰いまして」と、主催者の責任者が。ひな壇の周りは表彰式の準備だろう、慌しそうだ。（これから一番大事な表彰式があるんやもんな）。今しがた、上座の扉から来場して来た人物が理事長だった。

「理事長の吉富です。手違いで、遅れてしましまして、古武道の諸先生方に大変申し訳なく」と、丁寧な挨拶をされた。こちらでも、慌てて挨拶を返す。

「先生が残っていらつしゃたので、お見せ頂ければと思い、声をかけさせて頂きました」

「先ほど、お相手がいれば、と先生が仰いまして」と、ひな壇へ走った青年剣士が。

「お相手と言っても、何をすればよろしいんでしょうか？」責任者が不安そうな顔になる。年に一度の全剣連の大会だ。苔の生えた、古武道の演武等は、その前座（いや、余興か？）のようなものである。（はよ、帰ってくれたらよかったのに、てな顔をしている）。僻みではない。そういうものなのだ。

「防具を付けてもらいましてね、竹刀を中段に構え、その俣じつと、しとって頂ければ、それで結構ですもんけど」

「私がやりましょうか？」と、場違いなほどの優しいトーンの声が聞こえた。

「ああ、君か、頼みます」と、理事長。（主審やったはった人やがな）。決勝戦で主審を務めていた人物だ。

「いや、先生、帰り支度のところを、お引止めして、申し訳ありません」防具を付けながら、その主審が恐縮する。

「変なこと頼んで、こちらこそ、申し訳ありませんね、居合いとちやいますんで、すみませんな」

「解っております。先ほど、拝見しておりました。私、館長の緒方と申します」名乗りと挨拶をすませた。

「あ、あ、緒方先生、竹刀はなるだけ、使い古しの物でお願いしますわ」もう、面をつけ始めている。面がねの奥から、凜とした眼が顔くろくが見えた。（ただもんやないわ、この人は）。

表彰式を待ちわび、ざわめく場内。その寸暇の余興に駆け出される仕儀となった。館内がパッと明るくなった。館内の電燈が全部灯された。（秋やな、陽が落ちんのも早なった）。

「え、ご静粛に。理事長がお見えになりました。今、表彰式の準備を急いでおりますので、申し訳御座いませんが、しばらくお待ち下さい」との、アナウンスが流れた。

「その間、これより、当館館長緒方先生と古武道の先生との特別演武、組太刀居合いを、ご披露いただくことになりました。お静かにお願いいたします。では、よろしく願います」さざ波のように、私語が飛び交う場内に、少し苛立ったような司会者の声が響く。

「居合いとちやう、言うてんのに」ボソツト、吐いて、場内の中央へ出向いた。合わせて、館長も中央へ。答礼し、帯刀、そのまま座位した。呼吸を合わせ、館長が蹲踞する。竹刀を抜刀、ゆっくり立ち上がり、中段に構えた。

「うん、何時抜いた！」緒方は、面がね越しに切っ先が突きつけられているのを見た。座位の俛、刀を立てるようになっている。刀身の光沢が乱反射して、ぼんやりとした輪になり、座位で蹲り小さくなった相手が輪の中に消えて見えないのだ。

「礼をしながら、抜いたのか」緒方は、一拍おいて、竹刀を握りなおし、べた足を踏ん張った。その時、光沢の輪が左へ跳ね上がった。

「ツエーイ！！」さざ波を切り裂く気合が、場内を奔った。緒方は、手に軽い衝撃を覚えた。

「カラーン、カラカラカラーン」竹刀がほぼ中ほどから斬られて、板間に転がついくのが見えた。

（後書き）

「撃剣」シリーズ第一話です。二話は「撃剣を使う少年」を予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7079p/>

「平成の撃剣」撃剣シリーズ第一話

2011年6月2日08時08分発行